幹部職員からのメッセージ

「ひと、くらし、みらいのために」

青山　桂子 あおやま　けいこ

政策立案総括審議官
（統計、総合政策、政策評価担当）
【平成４年旧労働省入省】

本省において、勤労者の財産形成、人材育成、労使関係、企業年金・個人年金、地域雇用対策等の各行政、有期雇用の保護のための法改正、育児・介護休業法の改正などに携わったほか、総務省（地方行政）、宮城県庁（課長職）、愛知県庁（副知事）に出向。労働基準局担当の審議官を経て、令和５年７月より現職。

厚生労働行政官としての想い

この本の表紙の「ひと、くらし、みらいのために」というフレーズにお気付きでしょうか。現在だけでなく未来にわたって、人や暮らしを守るという厚生労働省の役割を表現したものです。「人の人生と生活の多くを占める労働生活をよいものにしたい」と思い定め旧労働省に入省した私は、入省後16年目頃にこのフレーズの起草にも関わりました。ここに込めた私の想いと、その前後の様々な業務経験を、今改めて思い起こしています。

「ひと」

厚生労働行政は「生身の人、労働者」の立場に徹する点で他省の追随を許しません。

有期雇用を５年間繰り返したら無期雇用に転換できるという法改正を、苦闘の末に仕上げた時期のある夕方。執務室に鳴った電話をとると、有期雇用で働く方からのお怒りの声。「そうすると企業が事前に雇止めするじゃないか。俺は月12万円で働いているんだよ？何のためにこんな改正したんだい？！」‥自分でも意外なほどひるまず、一呼吸おいて答えました。「もちろん、労働者の雇用の安定のためです。」ご意見にいう「副作用」はごもっとも。それへの対策も含めて安定した雇用に向けて制度を作ったことと、何をおいても「労働者のために」との原点からぶれず法改正ができた自負を感じた瞬間でした。

「くらし」

労働者にとっては、健康や生活が維持できる労働時間や賃金はもちろん、特に近年は、性別を問わず仕事と育児などとの両立ができる環境が不可欠です。育児中の労働者の残業を免除する、子どもが病気のときの休暇といった育児休業法改正に携わった際には、審議会では当初、強い法令規制に懸念を持つ使用者側と大幅かつ強力な規制を求める労働者側とが真っ向から対立。我々厚生労働省は両者の間を往復し、歩み寄りに向かうための下作業の日々。最後、労使が「大変だけど／完璧ではないけれど、これでやっていこう」と合意する瞬間の尊さ。お気づきのように、「当事者である労使が審議することで、本当にワークし、労働者のくらしを守る政策を作る」やり方もまた、労働政策の大きな特徴なのです。

「みらいのために」

みらい、というと「持続可能な社会保障制度の構築」がまず頭に浮かびますが、個人の視点でいうと「ゆりかごから墓場まで」。そして、労働政策としては、時代の変化にも対応できるよう不断の人材育成政策や、各労働者が職業生涯を通じてリ・スキリングできるような支援。現政権で力を入れていて、私自身、過去も今も携わっている政策です。

常に国民、労働者と同じ目線で、くらしを守り今とみらいを創る。虚心坦懐にそれに突き進むことができるのが厚生労働行政です。

わたしにとって厚生労働省とは

２年程度で異動しますから、今数えたら17のポストを経験していました。行政分野の点でも職位の点でも経験を多重に積むことで、厚生労働行政を、ひいては国民生活、労働市場を、どんどん多角的に見られるようになっていく職場です。労働組合、企業、有識者、厚生労働省以外の行政の方々など、幅広く沢山の方々とのつながりもできます。

私は地方勤務を２度経験する一方、私生活では２人の子の親でもあります。宮城県庁に出向した際は、ハイハイの長男と自分の母とともに、緊張して仙台の地に降り立ちましたが、その後地元の方々に温かく支えられ、公私ともに充実した自治体生活となりました。

未知の分野が常にあり、貪欲に飛び込むほど楽しく、私のような「好奇心の塊」には、たまらない場所。公私にわたり「リア充」な場所。それが厚生労働省です。

パンフレットを手に取っているあなたへ

皆さんの中には、厚生労働省を強く希望している人、選択肢の一つとして考えて迷っている人、認識がまだ強くない人、いろいろな方がいることと思います。

厚生労働省は非常に大きな組織です。所掌する行政分野は幅広く、国民に近い分野であるがゆえに、国民の皆様からよく注目されたり、厳しいお声をいただいたりすることが多いのも事実です。そんな中、本省だけでも多様な職種の職員が協力して働いていますし、地方の出先機関も多いです。それだからでしょうか、仕事が大変な（？）割に、明るかったり、熱かったり、人懐っこかったり、という人も多い、ハートフルな職場であるように感じます。

ぜひ厚生労働省に足を運び、職員と厚生労働省という組織を、そして、職場の「居心地」を感じてみてください。そして、厚生労働行政の担い手として、国民の幸せを創るために一緒に汗をかけることを、楽しみにしています。

「現場を知り、知恵を絞り、チームで挑む」

伊原　和人 いはら　かずひと

保険局長
【昭和62年旧厚生省入省】

旧厚生省の全部局をひと通り経験。本省以外では伊丹市、日本貿易振興機構（JETRO）ニューヨークセンター、総理官邸、日本年金機構に勤務。医政局長を経て令和4年7月より現職。趣味はランニング、時々、同僚達と皇居ラン。

厚生労働行政官としての想い

公務員生活38年目となりました。毎日がダイナミックで刺激的であり、飽きることはありませんでした。振り返ってみれば、幸せな職業人生だと思います。

これまで入省案内を5回、書きました。一貫して「社会保障のプロ」でありたいとこだわりつつ、経験を重ね、ポジションも変わっていく中で、外見のみならず心境も変化している自分がそこにいます。

20代：何も知らない自分が歯痒い時代
30代：自分のアイデアが政策に反映され、
　　面白くてたまらない時代
40代：自分ではなく「チーム」の力で、役目を果たす時代
50代：組織を動かして、責任をとる時代

こうした経歴の中から、役所ならではの2つの経験を紹介しましょう。

霞が関での「青春時代」

初めて課長補佐になったのはちょうど30年前、介護保険の創設に向けて新たに発足した高齢者介護対策本部でした。毎日、喧々諤々の議論を重ねる一方、現場に出かけ、そこで前例なき取組に挑戦する熱い方々に学ぶ中で、介護保険の形を作ってゆきました。要介護認定やケアマネジメント、財政安定化基金等、その後、障害福祉制度、医療保険制度でも活用される新たな仕組みを作り上げていく仕事でした。私にとって霞が関での「青春時代」とでも言うような、エキサイティングな毎日でした。

「チーム」で取り組めば「百人力」

もう1つは、プロジェクトマネージャーとして携わった、巨大プロジェクトの立ち上げと運営です。

15年ほど前、年金記録問題が政権交代の要因とされたほどの政治課題となりました。その結果、日本年金機構が発足し、私は記録問題対策部長として、全国29か所、総勢1.8万人の体制で過去の全記録を4年間で確認するプロジェクトの担当となりました。作業拠点や人材の確保、作業工程・システムの開発、加えて、日々発生する様々なトラブル対処と進捗管理など、それはまさに「起業」経験でした。

膨大な予算を使い、しかも期限が切られる中でのプロジェクト運営は、プレッシャーも大きく、「しびれる」日々でした。今思い返しても、よくもまあ、予定通り、プロジェクトを終えることができたと思います。

これを可能にしたのは、共に闘ってくれた仲間の存在です。「ひとり」でできることなど限られています。そもそも「ひとり」では、一歩前に踏み出す勇気も湧いてきません。しかし、「チーム」で取り組めば、「1＋1＝∞」となります。この時の経験は、「チーム」で取り組むことの心強さと生み出す力の大きさをとことん教えてくれました。

わたしにとって厚生労働省とは

大学時代、セツルメント活動に参画したことをきっかけに、福祉に関心を持ち、その延長線上で旧厚生省に入省しました。その後、旧厚生省の全部局を経験しました。福祉だけでなく、医療や年金、こども分野も経験できたことは、一生を支える社会保障という仕事に向き合う基本姿勢を体得する上で、良い機会になったと思います。

この間、障害や難病の当事者、現場のパイオニア、各分野の第一人者等との数知れぬ出会いがありました。こうした方々と一緒に課題解決を考える醍醐味は、霞が関でなくては経験できないことだと思います。

課題は現場で起こっている以上、解決策を見出すには、現場を歩き回り、話を聴き続けることが最短かつ最良の方法です。この仕事を続けてきたおかげで、全国各地に知り合いができました。

厚生労働行政の対象は、国民生活そのものであり、誰もがその善し悪しを評価できます。身近な家族や友人からの手厳しい反応から、反省とともに、次の一手のヒントを得ることもしばしばです。

パンフレットを手に取っているあなたへ

私の30有余年の仕事の中心は、高齢化により年々増える社会保障のニーズに対応するため、知恵を絞って仕組みを作り、財源を確保することでした。

介護保険創設、医療保険改革、少子化対策、障害福祉新制度、年金記録問題、難病新法等、同僚や第一線の仲間達とチームを組み、日本にとっても私にとっても初めて直面する課題に挑戦する日々でした。不思議なものですが、苦労した課題ほど思い出深いものです。

これから社会人となる皆さんの時代は、「超高齢化・人口減少」という、新たなチャレンジが待っています。担い手をどう確保するか、人生100年時代の働く姿をどう形づくるのかなど、これまでにない政策が求められると思います。

40年前、官庁訪問の際、不安で一杯だった自分自身を思い出します。果たして、こんな大きな仕事が自分にできるのだろうかと。

でも今なら言えます。一人ひとりは微力でも、仲間と共にチームで取り組めば、新しい歴史を作ることができます。あなたの踏み出す一歩、待っています。